

上田市文化財調査報告書第52集

市 内 遺 跡 Ⅲ

平成5年度市内遺跡発掘調査報告書

1994.3

上 田 市 教 育 委 員 会

上田市文化財調査報告書第52集

市 内 遺 跡 Ⅲ

平成5年度市内遺跡発掘調査報告書

1994.3

上 田 市 教 育 委 員 会

例 言

- 1 本書は長野県上田市における各種開発事業に伴う、平成5年度市内遺跡発掘調査報告書である。
- 2 調査は、上田市の直営事業として実施した。なお、事務局は上田市教育委員会事務局社会教育課が担当した。
- 3 調査は、1993年7月9日から1994年3月25日まで実施した。
- 4 本調査にかかる資料は上田市立信濃国分寺資料館に保管してある。
- 5 本書の編集発行は事務局が行った。
- 6 本調査に係る組織は次のとおりである。

調 査 指 導 五十嵐幹雄（日本考古学協会員、上田市文化財保護審議会委員）
" 岩佐今朝人（日本考古学協会員、上田小県誌考古編纂副主任）
" 塩入秀敏（日本考古学協会員、上田女子短期大学助教授）
" 川上元（日本考古学協会員、上田市立博物館長）
" 猪熊啓司（長野県長野高等学校教諭、上小考古学会員）
" 倉沢正幸（日本考古学協会員、上田市立信濃国分寺資料館主査）

社会教育課長 須藤清彬（社会教育課長）

文化係長 中村博美（平成5年9月30日退任）

" 岡田洋一（平成5年10月1日着任）

係 員 中沢徳士、尾見智志、塩崎幸夫、久保田敦子、清水彰、上原せい

- 7 調査に参加・協力していただいた方々（順不同、敬称略）

竹内和好、清水関二、市村みつ子、大井敬子、宮川祐一郎、甲田五夫、(財)長野県埋蔵文化財センター上田調査事務所

- 8 2調査の結果(8)国分寺周辺遺跡群の調査については、(財)長野県埋蔵文化財センター上田調査事務所と合同で実施し、調査結果の図は、同事務所からの提供による。

目 次

- 1 序説
- 2 調査の結果

(1) 高田遺跡	(5) 東馬場遺跡
(2) 塩田城跡	(6) 大屋西遺跡
(3) 木の下遺跡	(7) 十火矢遺跡
(4) 向村遺跡	(8) 国分寺周辺遺跡群

第一章 序 説

上田市は長野県の東部、通称「東信地区」に所在する。市域のほぼ中央を東西に千曲川が流れ、北に太郎山塊、南に独鈷山塊、東に烏帽子山塊、西に飯縄山塊と四方を山々に囲まれた地域である。歴史的に見ると、古代には創置の信濃国府・信濃国分寺が、中世には信濃守護所が、近世には上田城と、常に長野県史の表舞台に立ち続けたところである。

一方、地下に残る埋蔵文化財についても、昭和46～48年にかけての分布調査により、430件余りの遺跡が登録された。ところが、この調査は、遺物の表面採取や聞き込みによるものであったため、遺跡の範囲や保存状況が正確さに欠け、発掘調査着手後に調査の計画変更を余儀無くされる事態が数多く生じ、文化財保護部局のみならず、開発主体者にも多大な迷惑を掛けるケースがしばしばであった。そうした折り、1998年長野冬季オリンピックの決定により、上信越自動車道や北陸新幹線の工期が急激に圧縮され、これに伴う各種の官・民の開発計画が目白押しの状態となった。そこで、上田市教育委員会ではこれらの開発に伴う遺跡の保護措置を講ずるため、平成5年度国庫補助事業として、「市内遺跡発掘調査」を事業費1,000千円をもって実施した。

開発の情報は、公営のものについては上田市の各担当部局から、民間のものについては上田市開発審査の合議により得た。そして、社会教育課職員が現地踏査を行い、調査の要があると判断されたものについて試掘調査を行った。

調査は、開発計画区域内に小型バックホーによりトレンチを入れ、その土層や遺構検出面、出土遺物の有無を確認し、これと地形の在り方を考え合わせ、開発区域内における遺跡の範囲を示すこととした。なお、事業地が未買収の場合は、事前の現地踏査により開発計画図にトレンチをいれる箇所を示し、現所有者の同意を開発主体者（主管課）に得てもらい調査を実施した。

本年度はアパート等の民間開発に伴う「高田遺跡」、「塩田城跡」、「木の下遺跡」、「向村遺跡」と、道路新設等の公共開発事業に伴う「東馬場遺跡」、「八幡裏遺跡」、「十火矢遺跡」、「国分寺周辺遺跡群」の計8遺跡について調査を実施した。

このうち、高田遺跡では住居址や溝状遺構と共に布目瓦が出土し、施工主体者の協力により、別途委託契約を締結し、発掘調査を実施した。また、八幡裏遺跡では古墳時代の住居址が、国分寺周辺遺跡群では古代の集落址がそれぞれ検出され、平成6年度以降に本調査が必要な事業として、現在協議中である。

いずれも限られた予算と人員・期間の中での調査であるため、その内容についてはやや不十分な面もあるが、遺跡の保護措置を講ずる保護協議において、該当遺跡の範囲や性格について、開発主体者に対し、明確な説明ができ、これにより理解を得られたこと、また、発掘調査の予算措置やスケジュール調整が事前にかなり突っ込んで行えたことは、大きな成果であった。

(1) 高田遺跡

- 1 調査地 上田市大字小泉字古仁反田766-イ、-ロ、-ハ・767-1
- 2 調査の原因 小泉寛見アパート建築工事
- 3 調査実施日 平成5年7月9日及び12日
- 4 調査面積等 幅1m×長さ20mのトレンチ3本
- 5 調査担当者 中沢徳士

遺跡の位置と経過

高田遺跡は、上田市の西部、通称川西地区の大字小泉字高田の浦野川第1段丘が、第2段丘に向かって張り出す箇所位置する。当遺跡は、平成2年に発掘調査が実施され、奈良時代から平安時代を通じての堅穴住居址群と、掘立柱建物址群、溝址などが検出され、小泉条里遺構の形成時期と、東山道筋の研究に良好な資料を提供した。

今回、この調査地区の西に隣接する上記地番において、アパートを建築する開発事業届が、小泉氏から提出されたのを受け、事務局では、遺跡が当地にまで広がっている可能性が大きいと判断したため、小泉氏の承諾を得て、試掘調査を実施した。

調査の結果

調査は、申請地に南北方向にトレンチを3本設定し、バックホーにより表土を剥いだ。高田遺跡は、従前の調査により、耕作土直下に遺構が検出されることが判明していたため、土層の把握には、労を要しなかった。

この結果、いずれのトレンチからも北東方向に向かう溝状遺構が検出され、しかも、土師器・須恵器に混じって布目瓦がこの溝状遺構から出土した。また、Tr-01においては、住居址も検出され、間違いなく、高田遺跡が当地にまで広がっていることが確認された。ただし、この溝状遺構は、その方向性から、従前の調査により検出した溝址と繋がる可能性は低い。残念ながら、前回の調査と今回の調査区の間には、約50mほどの未調査区域が存在するため、確認はできないが、むしろ、現在も活用されて入る「高田堰」と平行に走ることから、この高田堰の前身と見ることもできよう。

事務局では、この結果を小泉氏に伝えるとともに、遺跡の保護協議を実施した結果、建物敷部分の約300㎡を調査する必要があるため、調査費を600千円、氏に負担してもらい、上田市の受託事業として実施することとした。この調査結果については別途報告する予定である。



トレンチ掘削状況

(2) 塩田城跡・上神戸遺跡

- 1 調査地 上田市大字前山字上神戸^{かみごうど}242-1
- 2 調査の原因 (仮称)温泉センター
- 3 調査実施日 平成5年8月5日
- 4 調査面積等 幅1m×長さ20mのトレンチ4本
- 5 調査担当者 中沢徳士

遺跡の位置と経過

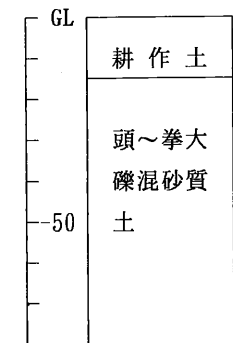
塩田城跡は、上田市の南部、塩田地区の大字前山に所在する長野県の指定史跡である。塩田北条氏によって開かれたとする節が有力であるが、現在のところ物的証拠は発見されていない。現段階では、村上氏がその基礎形態を形成し、武田氏によって甲州流の山城に改変された、ところまでは判明している。指定地区は、その山城部分だけであるが、城下町まで考えると、現在の東前山地区が、そっくり範囲に入るものと考えられ、遺跡分布図では、塩田城跡は、そのように図示している。

一方、上神戸遺跡は「上田市の原始・古代文化」によれば、立町、上町遺跡とともに、『東前山集落の縁辺に、北東方の上神戸、西方の立町、南方の上町の3遺跡が点在し、いずれも2,500～3,000㎡の範囲に、縄文期の石鏃や石斧、弥生後期の箱清水式、後期の土師・須恵器が出土している。宅地で分断されているため、一連の遺跡かどうか判然としない。』とある。

今回、申請地に(仮称)温泉センターを建設する予定があるという申請により、場合によれば、塩田城跡もしくは上神戸遺跡が広がっている可能性もあったため、調査を実施する運びとなった。

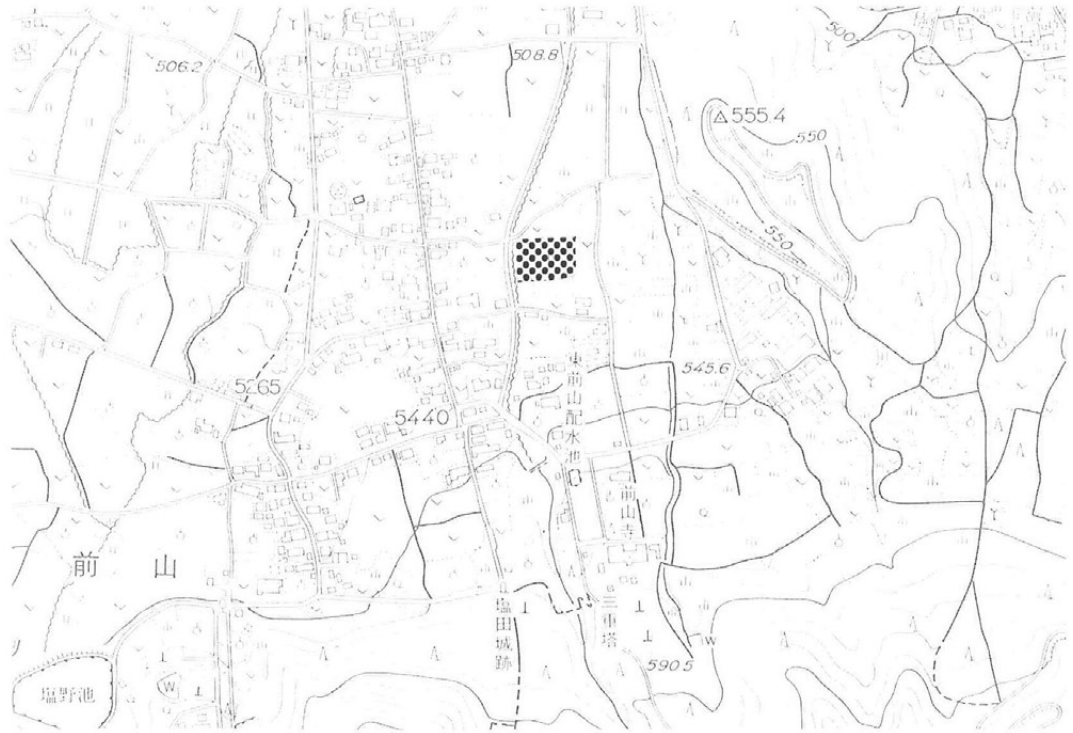
調査の結果

調査は、申請地の四周にトレンチを4本設定し、バックホーにより掘削し、土層断面を精査した。その結果、いずれのトレンチからも遺物・遺構はまったく確認されず、神戸川の氾濫の様相を呈しており、遺跡の存在は認められなかった。塩田城下町は、この川を東の堀として想定したものかと考えられる。また、上神戸遺跡等についても、神戸川を東の境として、現集落およびその周辺の畑地に分布しているものと推定される。



(cm)

調査地標準土層柱状図



(3) 木ノ下遺跡

- 1 調査地 上田市大字中之条字東町178, 182, 183-2
- 2 調査の原因 西沢共同住宅新築工事
- 3 調査実施日 平成5年8月24日
- 4 調査面積等 幅1m×長さ10m、長さ3m、長さ2mのトレンチ3本
- 5 調査担当者 中沢徳士

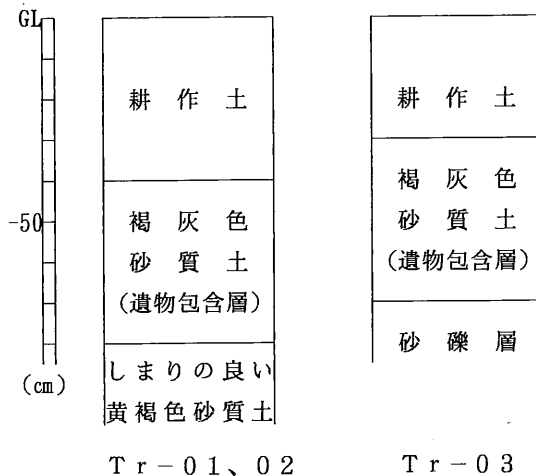
遺跡の位置と経過

木ノ下遺跡は、上田市街地の南部、大字御所～大字中之条地区に所在する。「上田市の原始・古代文化」によれば、『御所公民館周辺の遺跡で、一部が宅地などによって破壊されているが、約10,000㎡にわたって、中期から晩期の土師器、後期の須恵器が出土している。』とある。現地踏査では、記述にあるとおりの土器片が表採されるため、平成5年8月10日の開発事業届けに係る現地調査会で、事業主に試掘調査の必要があることを説明し、8月17日発掘調査の承諾書を得、8月24日調査を実施することとした。

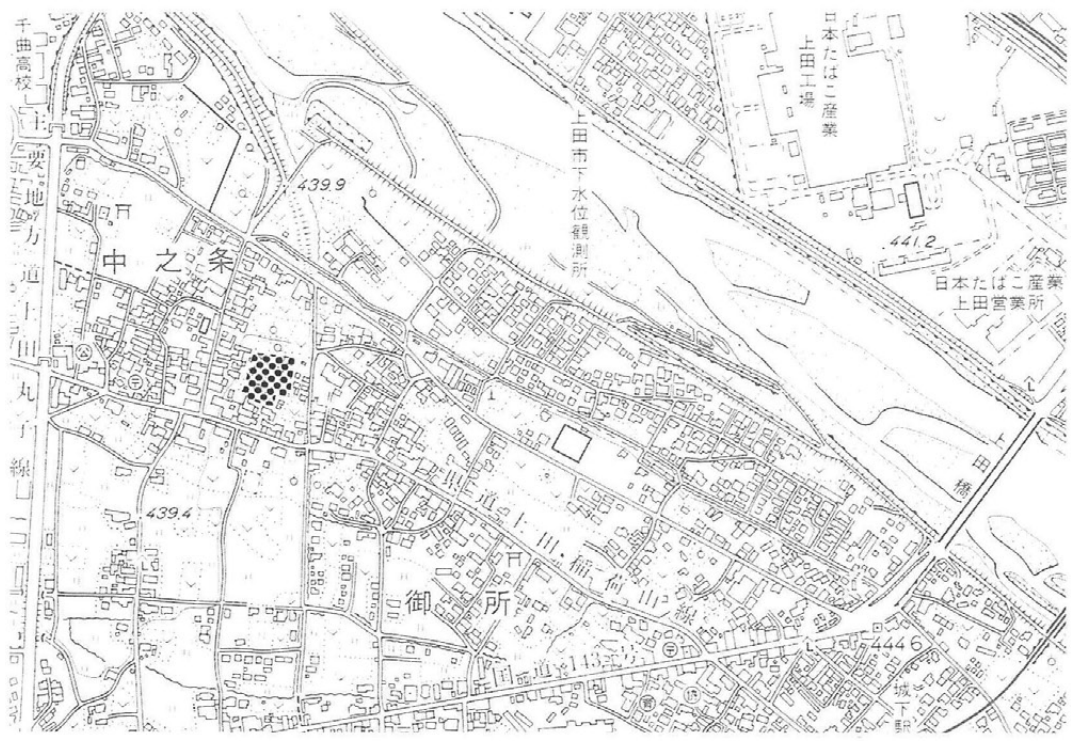
調査の結果

調査は、バックホーにより3本のトレンチを掘削し、その土層断面を観察した。その結果、いずれのトレンチにおいても土師器・須恵器片が出土し、特にTr-01においては、GL-90cmのレベルで古墳時代後期の住居址を断ち割ったほか、GL-90～-40cmには、遺物包含層が存在していた。また、他のトレンチにおいても、住居址こそ検出されなかったものの、同様に遺物包含層が存在していた。地形的に見ても、この地は千曲川の氾濫原から1段微段丘を上がった、東西に伸びる馬の背状の自然堤防で、遺跡の立地としては条件を満たしていた。

なお、この事業計画は取下げとなり、本調査は実施していない。



調査地標準土層柱状図



(4) 向村遺跡

- 1 調査地 上田市大字神畑字向村575番地
- 2 原因 手塚アパート新築工事
- 3 実施日 平成5年9月9日
- 4 面積 幅1m×約10m、幅1m×約20mのトレンチ各1本
- 5 調査担当者 中沢徳士

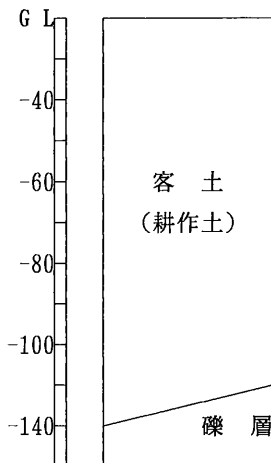
遺跡の位置と経過

向村遺跡は、上田市街地の南部、大字神畑に所在する。「上田市の原始・古代文化」によれば、『産川にかかる向橋から南へ進んだ集落の東南部の宅地と畑、およそ2,000㎡にわたって、前・中期の土師器を出土する。』とある。

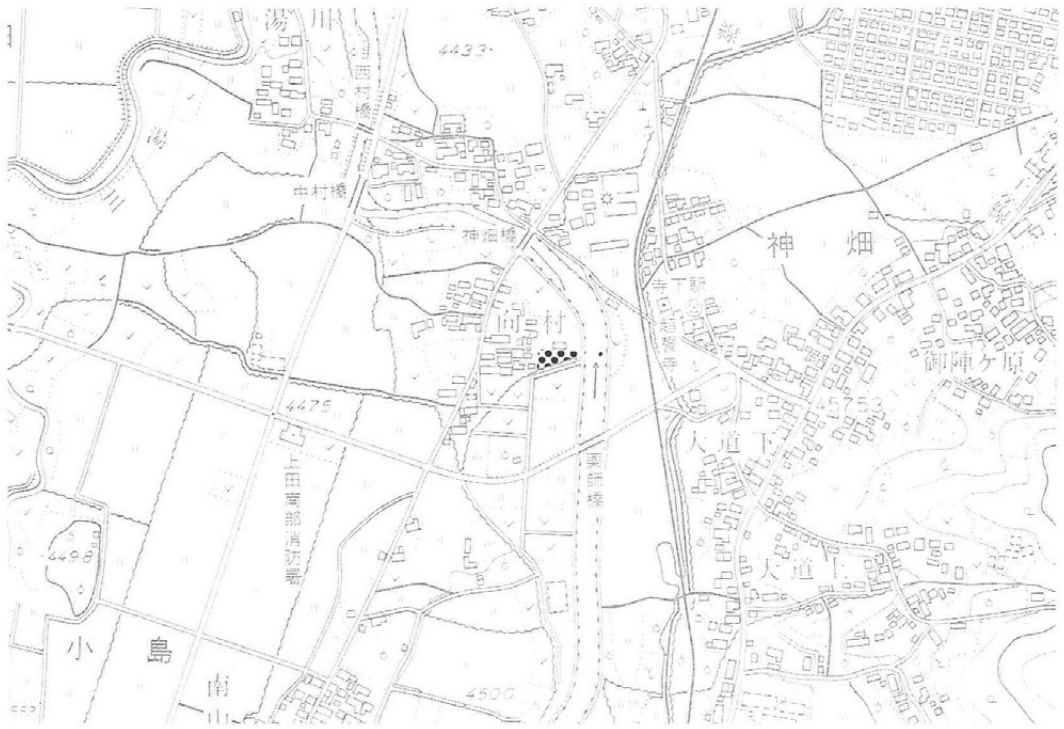
平成5年8月31日、事業主に遺跡の存在する可能性がある地なので、試掘調査を実施させてもらいたい、という申し入れをし、同意を得て、9月9日調査を実施することとした。

調査の結果

調査は、バックホーにより2本のトレンチを掘り上げ、その出土遺物や土層断面の観察により遺跡の存否を確認することとした。その結果、遺物の出土は皆無で、土層は産川の氾濫原の上に1.2～1.4mの客土をし、畑地として利用していることが判明した。さらに、事業主や近在の方々の聞き込みによっても、そのことが裏付けられ、向村遺跡は今回調査地の北西～北方向に比高差1～0.5mをもってひろがる微段丘状に存在するものであろうと推定され、調査地に遺跡は存在しないことが確認された。



調査地の標準土層柱状図は右図に示すとおりである。



(5) 東馬場・上原遺跡

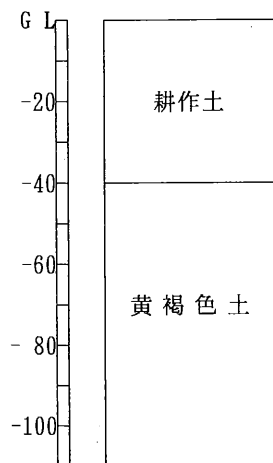
- 1 調査地 上田市大字前山字上原
- 2 原因 県営畑地帯総合土地改良事業塩田地区
- 3 実施日 平成5年10月19日
- 4 面積 幅1m×約10mのトレンチ3本
- 5 調査担当者 尾見智志

遺跡の位置と経過

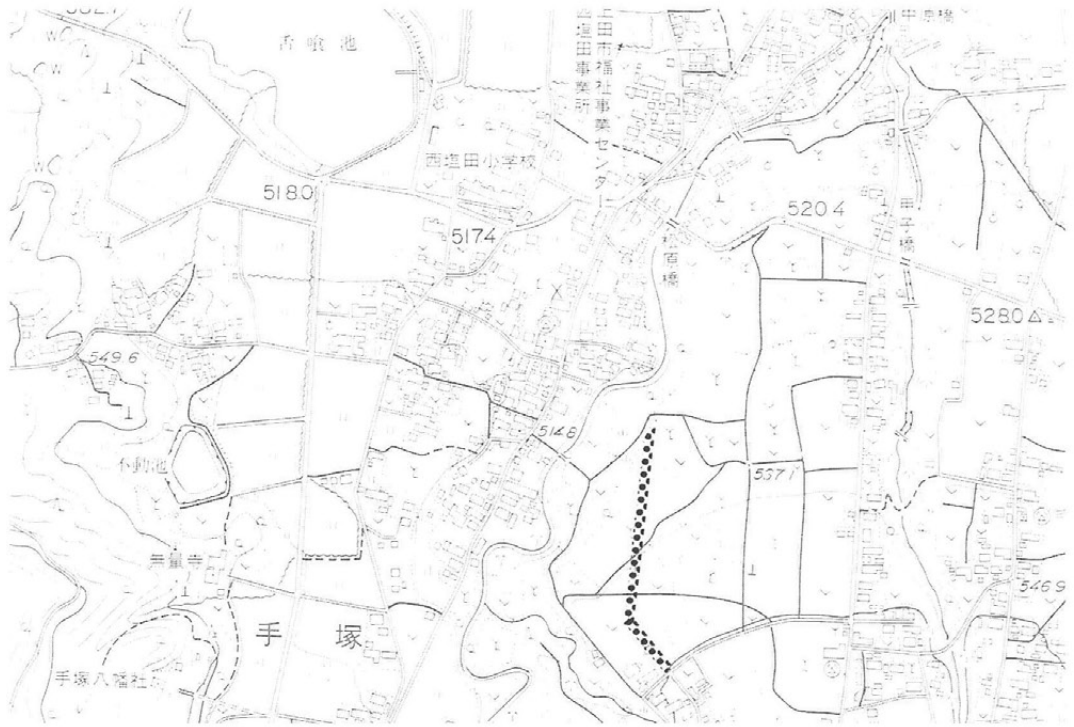
「上田市の原始・古代文化」によると東馬場遺跡は大字前山字東馬場に所在しており、「西前山公民館の西方約350m付近の畑地にあり、およそ5,000㎡にわたって、縄文期の打製石斧・石錐、弥生後期の箱清水式土器・磨製石鏃、後期の須恵器が出土している。」と記述されている。上原遺跡は大字前山字上原に所在しており「西前山公民館の北西方約150mのみにあり、およそ5,000㎡にわたって、後・晩期の土師器・須恵器が出土している。」と記述されている。現地を踏査したところ土器片が散布していたのでその場所を中心に工事施工予定地区にトレンチを入れた。

調査の結果

調査は、施工予定範囲内にトレンチを設定し、主に小型パワーシャベルにより掘削した。その結果、T-1より土壌及び住居跡と思われる遺構が検出されたが施工地区より外れるため引き続きT-1K東側で道路施工予定地であるT-2・T-3・T-4・T-5・T-6のトレンチを掘ったが遺構は検出されなかった。また、他のトレンチからも遺構は検出されなかった。以上の



結果から工事施工は遺跡の保存にほとんど影響はないものと考えた。



(6) 大星西遺跡

- 1 調査地 上田市大字上田2470-1, 2, 4
- 2 原因 長野県職員住宅建設
- 3 実施日 平成5年12月3日
- 4 面積 幅1mのトレンチ延べ60m、一部3×3mに拡張
- 5 調査担当者 中沢徳士

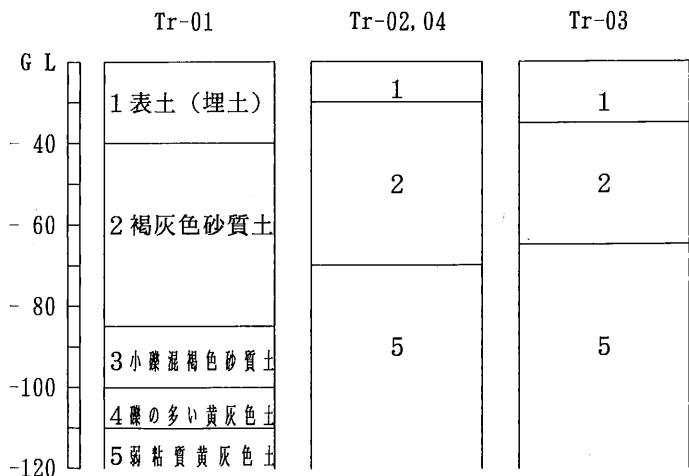
遺跡の位置と経過

大星西遺跡は、上田市街地の北部、新田地区に所在する。「上田市の原始・古代文化」によれば、『大星神社の西北方150mの畑地内から、縄文中期加曾利E期の土器片が、およそ5,000㎡にわたって表採された。現在宅地化が急速に進み、破壊が憂慮される。』とある。

今回、長野県の職員住宅建設事業に際し、従前の遺跡分布地図では大星西遺跡と八幡裏遺跡の中間に位置し、遺跡の範囲からは外れていたが、遺跡の存在する可能性が高いと判断して、試掘調査を実施した。

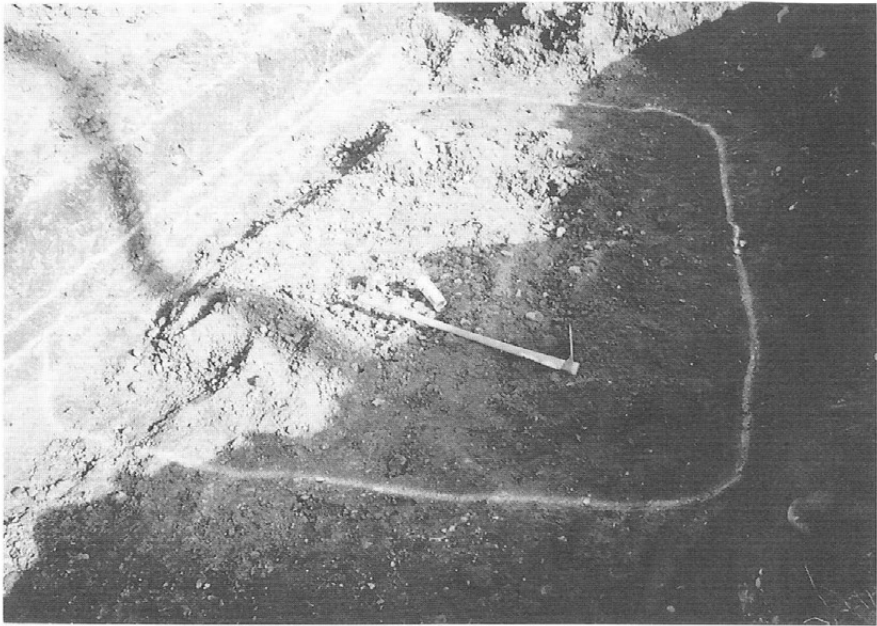
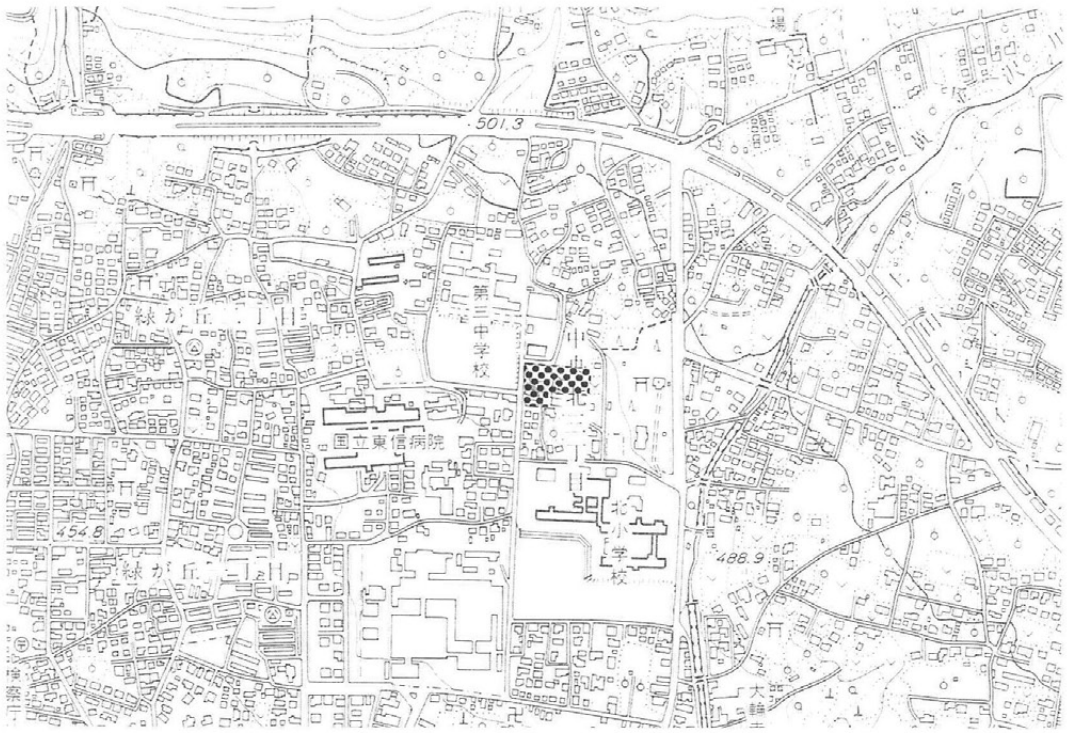
調査の結果

調査は、トレンチを4本設定し、バックホーにより掘削した後、土層断面を確認した。その結果、Tr-01において、GL-100cmのレベルから、住居址と思われる箇所があったため、これを拡張したところ、およそ2×2mの方形の住居址を検出した。時期的には、出土遺物から古墳時代前半と思われる。また、その覆土は15cm程度であった。また、Tr-03においても、GL-60cmのレベルで住居址の落ち込みと見られる土層が確認されているが、詳細は不明である。



る。他のトレンチにおいてもピット等が検出されているが、遺物の出土や遺構の密度は極めて薄い。

土層は右図に示すとおりで、3は遺物包含層で、遺構は、4層もしくは5層から検出される。



(7) 十火矢遺跡

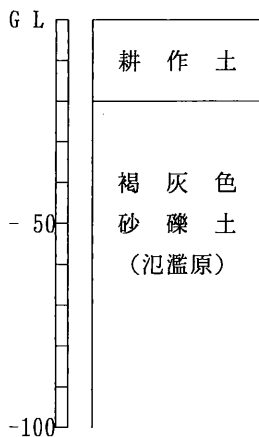
- 1 調査地 上田市大字下之郷字十火矢
- 2 原因 県道築地丸子線施工
- 3 実施日 平成5年12月9日
- 4 面積 幅1m×20mのトレンチ3本
- 5 調査担当者 中沢徳士

遺跡の位置と経過

十火矢遺跡は、上田市の南東部、塩田平の東部下之郷地区に所在する。「上田市の原始・古代文化」によれば、下迎原遺跡とともに、『駒瀬川に注ぐ地点の三郎川南北両岸にわたり、南北約250m、東西約70～80mの範囲に、後期の土師・須恵器が出土している。』とある。今回、長野県上田建設事務所により、県道築地丸子線のバイパス建設に先立ち、遺跡の存否を確認するため、試掘調査を実施した。

調査の結果

調査は、すでに買収の済んでいる土地から3筆を選定し、各筆に1本ずつトレンチを入れた。その結果、いずれのトレンチも調査地の西を流れる駒瀬川の氾濫原の様相を呈し、遺構・遺物の出土はまったくなく、したがって施工予定地には遺跡も存在しないことが確認された。



調査地標準土層柱状図

(8) 国分寺周辺遺跡群

- 1 調査地 上田市大字国分字西沖
- 2 原因 下堀バイパス施工
- 3 実施日 平成5年12月20日～21日
- 4 面積 幅2.0mのトレンチ10本(長さは任意)
- 5 調査担当者 中沢徳士

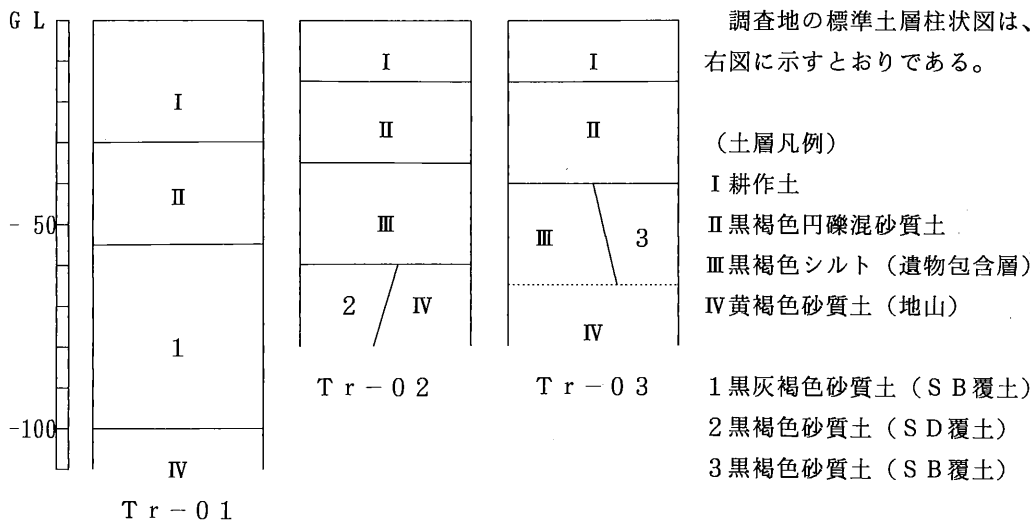
遺跡の位置と経過

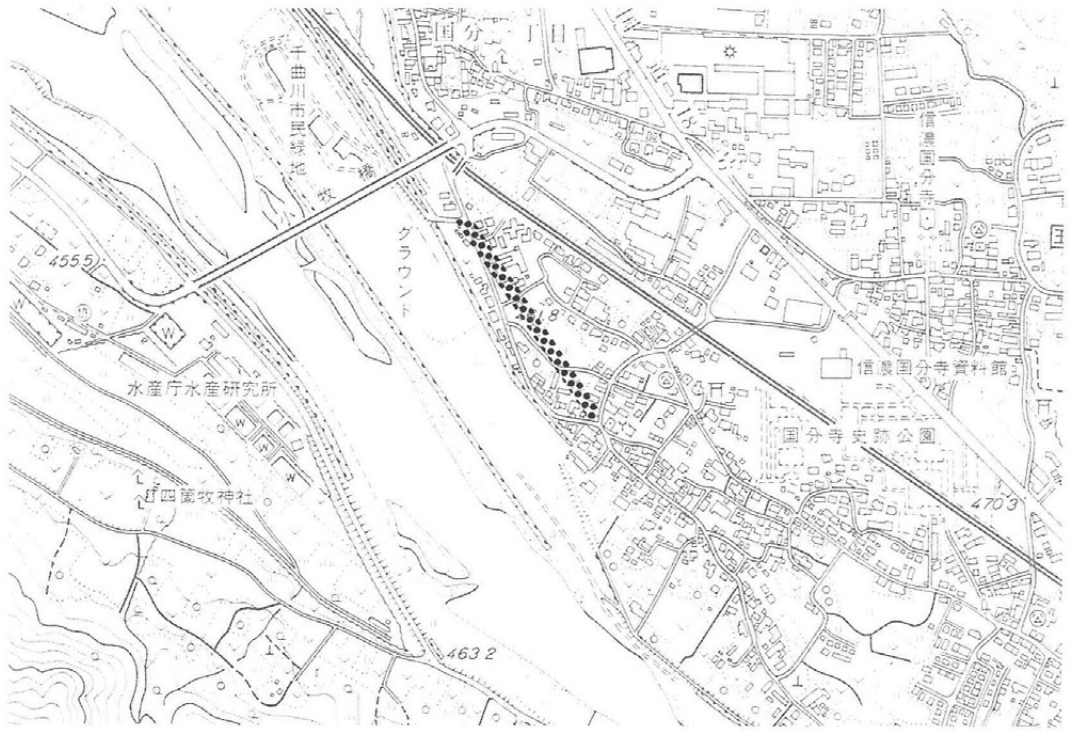
国分寺周辺遺跡群は『上田市の原始・古代文化』(1977年上田市教育委員会発行)に記されている、「浦沖遺跡」「前田遺跡」「仁王堂遺跡」「明神前遺跡」「堀遺跡」「西沖遺跡」の6遺跡の総称で、今回調査したのはこの中の西沖遺跡で、同書の記述によれば、『明神前遺跡の南方にあたる下堀集落の西部にあり、弥生後期の箱清水式、後・晩期の土器の破片などを出土する。分布範囲はおよそ5,000㎡である。』とある。

今回、当遺跡を上信越新幹線と仮称下堀バイパスが隣接して通過することになり、事務局は(財)長野県埋蔵文化財センター上田調査事務所と連携して試掘調査を実施した。

調査の結果

調査は、新幹線予定地も含め8本のトレンチを設定した。残念ながら予定地すべてが買収もしくは建物移転になっておらず、遺跡の東西の限界は知り得なかった。しかし、Tr-6~8に至っては、遺構・遺物の出土密度がかなり薄くなり、地形的な条件を考えると、遺跡の西限が近づきつつあるものと思われる。Tr-1~4からは、いずれもかなり高い密度で古代の遺構・遺物が出土している。





上田市文化財調査報告書 第52集

市内遺跡Ⅲ

平成5年度市内遺跡

試掘調査報告書

発行 平成6年3月25日

上田市教育委員会

印刷 田口印刷株式会社

